

Title	外傷患者に合併する急性上部消化管病変の臨床的研究
Author(s)	房本, 英之
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32353
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	房 本 英 之
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 4405 号
学位授与の日付	昭和53年10月3日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	外傷患者に合併する急性上部消化管病変の臨床的研究
論文審査委員	(主査) 教授 阿部 裕 (副査) 教授 恩地 裕 教授 神前 五郎

論文内容の要旨

〔目 的〕

近年、重篤な外傷患者の増加やICU、CCUの整備による患者の管理の向上は重症患者の救命や延命をもたらした反面、その後の急性上部消化管病変の合併頻度を著しく増す結果となり、しばしば止血しがたい大量の消化管出血や時には穿孔をきたし、患者の生命を脅かす重要な合併症のひとつとして、早期診断および早期治療が切実な問題となってきている。しかしこれまで多数例による系統的な検討はおこなわれていない。

そこで、私は外傷患者に合併する急性上部消化管病変の臨床像を明らかにすることを急務と考え、重度頭部外傷患者および広範囲熱傷患者に受傷早期よりできる限り経時的に内視鏡検査を施行し、急性上部消化管病変の発生頻度、内視鏡所見、発生部位、発生因子、経過、予後などに検討を加えた。

〔対象および方法〕

対象は昭和47年9月より昭和52年3月迄に阪大病院特殊救急部に搬送された意識障害および運動障害を伴う重度頭部外傷患者63例および広範囲熱傷患者22例（平均熱傷面積46.6%）の計85例で、男性67例、女性18例、年齢は3～83才で平均年齢は39.9才である。急性上部消化管病変の診断はすべて内視鏡診断によった（検査回数135回）。

〔成 績〕

1) 急性上部消化管病変の発生頻度は85例中62例（72.9%）であり、従来の手術例や剖検例による報告（10～30%）に比し著しく高頻度であり、重度外傷患者では常に急性上部消化管病変の発生を念頭において対処しなければならないことが明らかとなった。

2) 病変部位は胃が圧倒的に多く (96.8%), 次いで十二指腸 (22.6%), 食道 (21.0%) の順であった。又2~3臓器に病変が共存する例が35.5%にみられたことは特徴的であった。

3) 病変の種類は出血性胃炎が78.7%を占め、全例胃体部に発生し、幽門部に限局する症例は1例もなかった。急性胃潰瘍はほとんどが多発性であり、浅く、punched outあるいは不整形を呈し、粘膜ひだの集中はみられなかった。また77.8%が胃体部に存在し、胃角部単発例は1例もなく、胃角部に好発する単発性の深い慢性消化性潰瘍とは対照的であった。急性十二指腸潰瘍は単発例が多く、ほとんどが出血性胃炎を合併し、時に突然の穿孔例がみられた。

4) 受傷後急性上部消化管病変発生までの期間は3~4日をpeakに、72.6%が1週間以内であった。出血性胃炎は受傷後2日以内の早期より出現し、多くの例は7日以内に発生したが、これに反し、急性胃潰瘍は3日以後に始めてみられ、8日以後に好発した。しかし出血性胃炎より急性胃潰瘍に進展した症例は全く経験しなかった。

5) 初発症状としては、前駆症状なく突然の吐下血で発症する例が多く (69.4%), 腹痛を訴えた患者は3.2%にすぎず、無症状患者が27.4%にみられ、慢性消化性潰瘍の症状とは著しい相異を示していた。1000ml以上の輸血を要した大量出血例 (平均輸血量3200ml) の出血巣はほとんどすべて広汎な出血性胃炎、多発性胃潰瘍および十二指腸潰瘍症例であり、一方食道炎、限局性の出血性胃炎、単発性胃潰瘍、十二指腸炎の多くは非出血例か軽度出血例であった。15.7%に複数の出血巣が観察された。

6) 敗血症合併群では全例に病変が観察され、非敗血症群に比べ有意に急性上部消化管病変の発生頻度が高く ($p < 0.01$), 又急性胃潰瘍症例が高頻度にみられた ($0.01 < p < 0.02$)。副腎皮質ホルモン剤投与群では急性胃潰瘍が又腎不全例では出血性胃炎の合併が多くみられた。

7) 消化管出血後48時間以内の内視鏡検査では全例に急性上部消化管病変を観察したが、それ以後では20%に病変が確認できず、出血巣の確認や出血の持続の有無の判断に対して、消化管出血早期の内視鏡検査が重要であると思われた。

8) 出血性胃炎は1~2週間、急性胃潰瘍は2~4週間という比較的短期間で治療し、難治例や再発例はみられなかった。しかし一方保存的療法による消化管出血止血不能例は32.7%の高頻度にみられ、消化管出血死は10%をかぞえ、大量出血例の予後は極めて不良であった。潰瘍底に露出血管のみられる症例や敗血症、腎不全、黄疸、凝固異常などを合併する例に止血不可能例が多くみられ、5例に緊急手術をおこない3例を救命しえた。

〔総括〕

今回の検討により、従来の手術例や剖検例による報告に比べ、重度外傷患者に合併する急性上部消化管病変の頻度は著しく高率であり、出血性胃炎が多く、胃体部に好発すること、発生時期が受傷後早期であり、消化管出血を初発症状とする例が多く、大量出血をきたしやすく予後が不良であること、又急性胃潰瘍は浅く多発性であり、punched outあるいは不整形を呈することなどを確認し、精神的ストレスや飲酒などによる急性上部消化管病変や慢性消化性潰瘍とは臨床像に著しい相異点のみられることを明らかにし、早期診断および早期治療が極めて重要であることを指摘した。

論文の審査結果の要旨

本論文は重度外傷患者に合併する急性上部消化管病変（いわゆるストレス潰瘍）を多数例につき内視鏡的に検索し、従来の剖検例や手術例による報告に比べ、発生頻度が著しく高率であること、又発生部位、初発症状、経過、予後などの面において、慢性消化性潰瘍と種々の相異点がみられることを明らかにするとともに、新しい治療法を開発し、大量消化管出血患者の予後を著しく好転させたことは臨床上の意義は極めて大きい。